

アメリカ・テネシー州における伝統的な出産に関する研究 ——出産をめぐるコンフリクト

白岩 優姫 (人間科学研究科 コミュニケーション社会学)

1、調査の趣旨と目的

現代の日本は産科医療資源の枯渇に伴い、妊婦が産科医療にアクセスしにくい「出産の危機」が叫ばれている。「お産難民」という言葉も登場している。これは実際に出産を経験する女性身体をめぐる危機であり、今後ますます、女性間で医療資源の奪い合い (conflict) が加速すると考えられる。産科医療資源枯渇には抜本的な解決策がなく、このような現実を踏まえながら新たな出産を支える制度のオルタナティブを考えることが急務であるといえる。

本調査は、アメリカ・テネシー州にある助産施設の The Farm Midwifery Center を中心として訪問し、アメリカにおける医療になるべく頼らない「自然な出産」 (natural birth) の先駆的实践と、その社会的位置づけを把握することを目的とする。そして、日本での応用可能性を検討し、出産を支える制度のオルタナティブの構築のための重要な視点を提供する。

申請者はこれまでの研究 (修士論文) で、日本における「自然な出産」をめぐる歴史の変遷を明らかにしてきた。その結果、日本における「自然な出産」は、日本の社会的背景に合わせて独自の変遷を辿ってきたものの、アメリカからの影響も少なからず受けていることが明らかになった (白岩 2008)。例えば、フランス発祥の「ラマーズ法」は、在日アメリカ人グループ Parent Craft Japan が 1971 年に日本に紹介したのをきっかけに広まっていた。このように、アメリカの「自然な出産」は日本に大きな影響を与えているために、日本の現状を理解するためにも、アメリカの研究をする必要があるといえる。

また、これまでの出産をめぐる社会学・フェミニズム・文化人類学等の研究は、医療化された出産を批判し、出産をめぐる現代の価値観が普遍的なものではないことを明らかにしてきた成果の一方、「自然な出産」の価値を自明視し、肯定することに関心を集中させてきたといえる (落合 1989 船橋 1994 杉山 2007)。本研究は、「自然な出産」の価値を、社会的背景、政治的背景、文化的背景と照らし合わせて多角的に明らかにする。

<参考文献>

- 落合恵美子, 1989, 『近代家族とフェミニズム』勁草書房。
船橋恵子, 1994, 『赤ちゃんを産むということ——社会学からのこころみ』NHK ブックス。
杉山章子, 2007, 「時代が動けばお産も変わる」松岡悦子編『産む・産まない・産めない——女性のからだど生きかた読本』講談社現代新書, 90-106。

白岩優姫,2008,「産む主体であることのアンビヴァレンス」2008年大阪大学修士論文

2、調査概要

(a)訪問施設

- ・ The Farm Midwifery Center (ナッシュビル)
- ・ Amish Community 助産師宅 (ナッシュビル)
- ・ バンダービルド大学 助産師ユニット (ナッシュビル)
- ・ WWMC バースセンター (ノックスビル)

(b)収集資料

- ・ Ina May Gaskin インタビューデータ
- ・ The Farm Midwifery Center 資料
- ・ バンダービルド大学助産師 インタビューデータ
- ・ WWMC バースセンター資料
- ・ WWMC バースセンター医師・助産師・スタッフ等インタビューデータ
- ・ 全訪問施設の写真

3、調査の成果と今後の展開に向けて

ここでは、調査の成果と今後の展望を明らかにする。ポイントは以下の2点である。詳しくは、調査データを示しながら報告予定である。

(a)アメリカにおける「自然出産思想」の源流

アメリカにおける自然出産運動の先駆けとなった Ina May Gaskin への聞き取り調査から、「自然出産思想」の源流として3点のポイントを確認できた。一点目は権威への抵抗としての「ヒッピー文化」、二点目はキリスト教、仏教、ヒンズー教などの要素をミックスさせた「宗教の複合」、三点目は「オリエンタリズム」である。現代のアメリカの出産は、日本よりも医療化が進んでおり、「自然出産思想」はそれへの対抗文化的側面を有していた。

(b)助産師のパワーポリティクス

日本と同様に、アメリカにおいても助産師は医師ほどの権威を与えられていない。そして、彼女らは権威に対しては慎重な態度を示していた。しかし、医師のような独立性を獲得するためのパワーポリティクスが存在していることを確認した。